

明和・安永期洒落本におけるタとテイル

—アスペクトを中心に—

上野左絵

【キーワード】アスペクト 近世語 タ テイル 洒落本

明和・安永期の会話体洒落本作品を資料として、動詞アスペクトに関わる形式である、終止法の「タ形」と「テイル形」を取り出し、その資料中における意味用法について、現代日本語のアスペクト研究の成果を参照しつつ考察・分類していく（作品名は本論文の末尾に示した）。

なお、以下に用例を引用するにあたって、現代語での用例は◇で示し、本資料中での用例は◆で示すこととする。洒落本からの用例に関しては、作品名、巻数、ページ、会話文か地の文かの別を示す。また原文の振り仮名について、必要なもの以外は省略した。

1. 《タ形の用法》

①動作の完成

現代日本語においてタ形は、ある運動の始発から終結までをひとまとまりとしてあらわし、それを過去のある特定の時間に位置づける。これはタ形の基本的な意味であり、本資料中にも同様に、下記のような例であられる。

- ◆いつそ悔しくつて。わつちやア^{なき}泣いたよ（『甲斐新話』6・527 会話）
- ◆《禿みやの》ここな唐人めおいらもあぶないめにあいやんした（『郭中掃除』7・167 会話）
- ◆《梅大夫》イ、エ。一子座はいたしやせんが。此間中川て。後から。見掛やした。（『辰巳之園』4・375 会話）

上記の3例では、いずれも「泣く」「あう」「見掛ける」という動作が終結してから発話時まで、ある程度の時間が経っており、明らかに「過去」と判断できるが、中には次のように、過去のある運動の終結が発話時の直前であるばあい、時としては発話と重なるばあいもある。

- ◆《女郎》コンナけがらわしい物は [といふてかんだ文ふすまへなげる]
 《客》ア、かわいそうにいたかろに
 《女郎》モツつきつくなげよう物イヤホンニよく書なんすぞわツちらがよ
 うにエ、かゝぬ者もあるに
 《客》ソリヤ例のみそが出た (『郭中奇譚』4・303 会話)
- ◆《善》また無有様のわる口がはじまつた (『駅舎三友』9・208 会話)

②変化の結果

過去に起こった変化の結果が、発話時において残存しているばあいをあらわす。

- ◆《雷》時におみほうちつとみねへうちとんだ美しく成たの (『駅舎三友』9・109 会話)
- ◆《親分》サアモウ大方みんな来そろつたが。(『俠者方言』5・205 会話)

以上の2つが本資料中でのタ形の基本的なアスペクトの意味となる。

そのほか、いくつかの動詞において、ものごとの状態をあらわす用法が特徴的にあらわれる。

③単なる状態

現代日本語であればテイル形を用いると思われるところにタ形を用いているものが、ものごとの状態をあらわす場面でいくつか認められる。

- ◆《客》おれも随分こたへていたが後からぞつと仕そふな所を前からぞつとしたからこらア畜生や化物じやアねエ鬼じやアねエかしらんと思つたらとほうもなくこわく成たつけ思ひなしかぬしの兒によく似たよ (『当世左様候』7・247 会話)
- ◆《庄》おまへおりよヲ折助にするのか
 《先》そうせにやア。はじまらない。
 《庄》大のへんとこだが。ドレよこしない [とこしにぼつこみ]
 《庄》へへよく似合つたかね。(『多佳余字辞』9・70 会話)
- ◆《かか》コウむすこかぶだよ。とんだおまへニ。のぼせたよ。(『寸南破良意』6・621 会話)
- ◆公の水仙は能く入ツた。しかし三もとの花が。多すぎる。蒼ばかりにしねへ。はかまも三もとなから。出したがいい。まだ冬至めへだによ。(『通仁枕言葉』11・3 会話)

「似る」「似合う」「のぼせる (惚れるの意で)」「入る (花を活けるの意で)」と

いう動詞が各1例ずつ確認できる¹。

本資料中におけるこのようなタ形の用法は、古典語の「タリ」の性質をわずかに残すものといえるのではないだろうか。

なお、本資料中では「似る」の各形の出現数は下記の通りで、用例数自体が少ないものの、ほとんどテイル形であらわされている。非常にまれな例といえるだろう。

	ル形	タ形	テイル形	テイタ形
似る	0	1	7	0

なお、動詞「似合う」の用例が1例あり、これも同様に状態をあらわすが、少々性質を異にするようである。他の動詞が現代日本語においてはテイル形と入れ替えが可能であるのに対し、「似合う」だけは、

- ・よく似合っているかね。
- ・よく似合うかね。

と、ル形をも取りうる。他の動詞の場合、

- ・ぬしの兒によく似ているよ
- ・*ぬしの兒によく似るよ

と、ル形を取ることができない。

「似る」と「似合う」との比較において考えてみると、「似る」「似合う」とともに、非常に状態性の強い動詞である²。しかし「似合う」は「似る」と比較して、発話者の主観・評価がより多く含まれる。その点において次に挙げる「感情や思考の状態」に近いものではないかと考える。

④感情や思考の状態

話し手の心理状態を述べる動詞では、発話者の、発話時の状態をあらわすタ形がみられる。

¹ ほかに「わく」という動詞で、

◆《里》みどりやモフ湯はわひたか

《禿》よヲふく。わきいした (『南閩雑話』6・411 会話)

という用例では、タ形は変化結果の継続をあらわすが、

◆ [と。屏風の外トへ。あんどうに。てうしを。くわんぜよりで。さげて置。

あり明の火で。かんをして置。てうりのふたを明て] フウよくわいた (『寸南破良意』6・560 会話)

では、発話時に酒は「わく」という変化過程の途中にあることになる。これも現在の状態に分類するべきかもしれない。

² 金田一 1950 におけるいわゆる「状態動詞」とは異なるものとする。高橋 2003 では、これを区別するために「運動のない現象的な事態」について「静態」という用語を使っている。

◆《徳》ぐつと草臥ました（『当世左様候』7・114 会話）

◆《源》是は憚りヲイこぼれるこぼれる此盃のやり所にこまつた（『世説新語茶』7・432 会話）

◆そんなら京町と申たればこれは又ついしやうすぎていかなどとおつしやつてこまりました（『郭中掃除』7・35 会話、先日あったできごとを話す）
「草臥る」「こまる」という変化は発話時以前の過去のある時点で成立しており、変化の結果とも取れるが、動詞自体が状態性を強く帯びるため、発話時の話者の状態をあらわすことになる。

またこの「草臥る」「こまる」といった動詞は、ル形においてアスペクトから解放される用法がある。

◇ときどきなまあくびをして、かすかなかすれごえで、「ねむい」という。「のどがかわく。」という。（高橋 2003 中の用例より、『本日休診』）

前項に挙げた「似合う」がル形をも取りうるのも同様のしくみではないかと考える。

⑤思考をあらわす動詞「思う」

◆《清》ほんにかへわつちやア又本の鳥だと思ひしたよ（『粹町甲閨』9・472 会話）

◆時二わたくしのおいらんはいつかたへさつたかしら

《蛾》かわころもさんはしたにいなんしたとおもいいした（中略）

《若》見てまへりましょう（『深淵情』8・595・597 会話）

同じ動詞の用例だが、最初の例は、「話し手があたらしい情報をえたため、その時点で自分の考えや行為が過去のものとなったことをしめしている」[鈴木 1979] ものであり、発話時以前に「思う」という動作は完結している。一方あとの例では「思う」という動作は発話時に至っても引き続いている。

高橋 1985 には「おもった」「おもっている」について、「おもう」が一人称のル形で使われるとアスペクト的意味を持たなくなることに関連して）

過去におもったということは、「おもった」ということばを言うときの言語活動のそとに存在する。この完成相過去形（引用者注：タ形）は、過去の心的動作を始発から終了までまるごとのすがたでさしだして、完成相の基本的なアスペクト的意味を実現している。また、「おもっている」は、現在をふくむ持続過程がことばのそとに存在していて、動作を、その持続過程のなかにあるすがたでさしだしている。

と言及しているが、本用例ではタ形によっても発話時を含む持続過程、現在の状態をあらわしていることになる。

⑥ 遂行文

次に挙げる動詞は、タ形で遂行的な文をあらわしている。

あやまる（11例）、痛み入る、受け取る、お目にかかる（以上1例ずつ、のべ14例）

なお、「あやまる」についてはタ形11例のうち、9例までが、遂行文で用いられていた³。

◆《無》これは御めんあやまつた（『駅舎三友』9・264会話）

◆《お花》御気にさわつた事が。有ならの。あやまつた。かんにん。しなんし。（『寸南破良意』6・351会話）

反対に、「あやまる」でル形での遂行的な用例はひとつもない。

現代日本語を資料としたテンス・アスペクトの先行研究においても、タ形に遂行的な意味を認めているものはみあたらない。鈴木 1979 では、現在未来形（ル形）の特殊な用法として「話し手の態度を表明する文」として、賛成する、頼む、詫る、などの動詞を挙げているが、それについて

この用法に対応する過去形はない。この現在未来形を過去形にかえると、アクチュアルな過去の意味になって、現在未来形のもっていた特殊な機能はなくなる。

としている。

ちなみに、同じように遂行文となる「頼む」という動詞の場合は、本資料中ではタ形での例はなく、ル形にしかあらわれない⁴。ごく一部の動詞にのみ認められる特殊な意味であるといえるだろう。

⑦ 命令のムード

アスペクトとは直接かかわらないが、現代日本語においてもタ形で命令のムードをあらわすことが知られている。このような用例は、本資料中では次の1例し

³ 湯澤 1954 では「現在に関することで、その事がらを現実に強く確認する意味をあらわすものである。」とし、

○ヲヲ有た\、是ごろふじませ（『落嚙無事志有意』寛政10年）

○ヲットこつちでは無かつた、こつちの手よノ、ソラ・・・（『妙竹林話七偏人』安政4年）

○ア、あやまつた\、〔銭ヲ〕出すよ\（『花暦八笑人』文政3年）

という例を挙げている。しかしこの説明ではテンス・アスペクト的には不足であろうし、発言することがすなわちその行為になるという遂行的意味をとらえていない。

⁴ 現代語においても「よろしく頼んだよ」というような言い方はあるが、これは「頼む」という動作が完結したということに焦点をおいており、遂行文とは異なる。

か見られなかった⁵。

- ◆《よし大しん》またあすのばんにくる。さアさアはなした。(『一事千金』8・193 会話)

⑧動作の反復

動作がある過去の期間に非連続に繰り返されることを示し、その期間が短ければ動作の反復、長くなれば次項の主体の性質という意味になる。下記の2例は、いずれも「動作のくりかえし」に類するものであろう。

- ◆《らい》そふいふわけとはつゆしらすに。むり斗ツリいひやした。(『妓者呼子鳥』7・492 会話)
- ◆とんだ為に成た。客だあな。夫だけどの。どうも内が。きびしいとよ《おせつ》フウ夫でもよく。ちよつちよつと。来(きた)がの。(『寸南破良意』6・427・428 会話)

⑨主体の性質

「主体の性質」は現代語の用例では

◇戦前は、兄が死ぬと、弟がその家督を相続した。(高橋 1985 より借用)
といったものであるが、本資料中ではこのような例は挙がらなかった。これは洒落本という資料の性質、また中でも会話体が多いため説明的文章があまり用いられていないという理由によるものと考えられる。

過去という性質上、発話時には既にその動作が完結しており、動作がくりかえし行われる期間が未来を含まない分必然的に非過去形よりも短くなる。そのため、「習慣」まではあわせても、時間的な制約を完全に超えた「性質」(水は 100 度でふつとうする、のような普遍の真理)をあらわすことができない。この点において、夕形はあくまで過去の事象をあらわし、テンスを超越した表現をすることができない。なお、高橋 1985 ではこのように、動作と現実との関係が直接的ではない(二次的である)文の属性について、アスペクトから解放されているとする。

⁵ なお同様の用法はタリ形には下記の3例がみられる。

- ◆《隣》やかましなしに。口明ケをしやしやう。みんなだまつて聞たり聞たり。(『遊婦里会談』9・24 会話)
- ◆《長》おつとまつたり(『深淵情』8・370 会話)
- ◆《安》ヲツト爰へもよこしたり(『深川新話』8・264 会話)

2. 《テイル形の用法》

①動作の継続

- ◆《新造》なんだかいつそはらを立ていつそ小ごとを言ッて居なんすよ（『穴千鳥』7・560 会話、客が別の部屋で騒いでいることを連れ客に知らせる）
- ◆万さんも又さんも。何をはなして居なせへす。（『伊賀越増補』9・319 会話）
- ◆《琴》いま。おめしをたべて。いねんすよ（『南閨雑話』6・168 会話）
- ◆《里》アレ見ねんし舌を出して。笑つて居るよ（『南閨雑話』6・488 会話）

これらの例では、動詞のあらゆる動作そのものが一定のあいだ持続していることを示している。

②変化結果の継続

- ◆《源六》糸へ女郎衆が有かの
《十》マア御ろうじやし揃ておりやす（『世説新語茶』7・370-371 会話）
- ◆《春》いらぬおせわさ幸さんおめへ何かを持なんしたかへ
《芝》ウウ持た持た
《源》まだ何か落てをります（『南客先生文集』9・225 会話）

これらの例では、ある動作による変化の結果が発話時において継続している事を示す。

この用法は先に述べた夕形における「変化の結果」と近い意味を持つと考えられるが、継続相が結果が継続している状態に焦点をあてるものであれば、完成相は「現在の状態が引き起こされた原因となる変化」に焦点をあてるものだと考えられる。たとえば、

- ◆《徳》おつるさんはきげんはなおつたか（『大劇場世界の幕なし』11・194 会話）

といった時には「機嫌がなおる」という変化が起きたかどうかかが問題であり、

《徳》おつるさんはきげんはなおっているか

という時には、現在の状態が一番の問題となっていると考えられる。

本資料中におけるテイル形の用法は主に上記の2つに大別されるのだが、現代日本語においては派生的な意味として、継続性を表さないテイル形の用法があることが知られている。

これらの基本的意味と派生的意味について、工藤 1995 では次のような表にまとめている（表1）。

ここではテイル形の派生的意味とされる「パーフェクト」、「反復性」、さらに時間性とらわれることなく状態をあらわす「単なる状態」のあらわれ方について見ていく。

(表1)

形式\意味	基本的意味	派生的意味	
スル	〈完成性〉	／	〈反復性〉
シタ	〈完成性〉	〈パーフェクト性〉	〈反復性〉
シテイル	〈継続性〉	〈パーフェクト性〉	〈反復性〉
シテイタ	〈継続性〉	〈パーフェクト性〉	〈反復性〉

③パーフェクト

パーフェクトの意味について工藤 1995 は、「基本的意味〈継続性〉に対して、〈ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること〉をあらわしていると規定することができる」としている。そしてその下位分類として〈未来パーフェクト〉〈現在パーフェクト〉〈過去パーフェクト〉を次のような用例を挙げて説明している。

〈未来パーフェクト〉…設定時点・出来事時点が発話時よりも未来にある

(a1) 然し私は今その要求を果たしました。もう何もする事はありません。この手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。(こころ)

〈現在パーフェクト〉…設定時点＝発話時点に先行して出来事時点がある

(b1) 「……いつかも言ったでしょう。私は 1 年半前に探偵に源太のことを調べさせているんですよ。知っていて当たり前じゃないですか」
(葬送行進曲殺人事件)

〈過去パーフェクト〉…設定時点・出来事時点が発話時に先行する

(c3) 禅智寺に行ってみると、業行はすでに 2 ヶ月程前に、筆写した経巻類を詰めた箱を数個預けたまま、姿を消していた。(天平の甞)

このようなパーフェクトをあらわすと思われるテイル形の用例は、本資料中にひとつも見当たらない。

◆ わつちか帰る時分にも。まだいちつて居たツけが。(『通仁枕言葉』11・15 会話)

◆ 《松》あの時ア滝川さんのざしきでお食をたべて居いた(『粹町甲蘭』9・335 会話)

など、基準時において動作が継続していることをあらわす例は多くあるのだが、少なくともテイル形全 243 例中、パーフェクトの用法のテイルは見つからなかった。

ではパーフェクト的表現がひとつもなされていないのかというと、そういうわけでもない。下記のように、夕形によるパーフェクトの形は多くあらわれている。

◆ 《すがわら》つかぬ事だが。いつか。五郎さんに。いつて上いた事を。

ききなんしたかへ (『大通秘密論』8・151 会話)

- ◆《谷》商べへ屋が出来てから石をいけへこと入れたからちつとは直つたのさ (『甲駅新話』6・32 会話)
- ◆《糸》モウうたぐりははれたよ (『風俗砂払伝』10・112 会話)
- ◆《長》どふか雨気づきやした。もし降たらばおずるけさ。(『芳深交話』9・271 会話)

④反復性

反復性とは、「運動の時間的展開の(複合的)とらえ方⁶」である。運動の一回一回をおのおの完的にとらえた上で、その運動の集合体を継続的に示す。夕形において「動作の反復」の例を挙げたが、これは一回一回の完結した動作を焦点とするのに対し、反復性ではその集合に焦点を置く。現代語の例を挙げれば、

・父はいつも焼酎を飲んでいる。(作例)

といったように、「飲む」という動作の継続性はここでは問題にされず、「飲む」という完結した同じ動作が、抽象化された時間内に繰り返し行われることを示す。反復性の意味においてはアスペクトは対立せず⁷、それゆえ、ル/テイルの入れ替えをおこなっても文意に大差を生じない。

・父はいつも焼酎を飲む。

・父はいつも焼酎を飲んでいる。

資料中からいくつか例を挙げる。

- ◆マア手めへなんざア。売られる身だから。買はれている。(『喜夜来大根』10・108 会話)

この例は、買われるという動作が恒常的に行われるという主体の性質(ここでは女郎という職業)をあらわしている。

- ◆《外ノ女良》わつちやア。初会の客を取て。ゐるはな。(『寸南破良意』6・940 会話)
- ◆お前はしんしつかねエから酒を呑んじやアねて斗ツりゐなんす (『穴千鳥』7・529 会話)
- ◆此頃はとみやむじん斗りつけてゐる。(『妓者呼子鳥』7・49 地の文)
- ◆《よし大しん》そのはつき。ふだんとらの巻や。しなん所をよんでいやす。(『一事千金』8・152 会話)
- ◆ほんに此ごろじやア外聞の悪いほど初会ばつかり取て居いす (『南客先生文集』9・303 会話)
- ◆此頃は外聞がわるい程初会斗取ていやすはな (『風俗砂払伝』10・104 会)

⁶ [工藤 1995] p.147

⁷ [工藤 1995]においては「複合化=中和される」という言い方をしている。

話)

これらは「ふだん」「このごろ」などの形式によって、ある程度の長さの期間が示され、「ばかり」「～ては」の形式によって動作の反復をささげている。また、

◆ふだんとらの巻や。しなん所をよみます。

とル形に言い換えても意味が大きく変わらない。これらのようなテイル形の反復の意味は、洒落本資料中においても多く見受けられる。

⑤動作の継続

上記に挙げた反復性のテイル形と紛らわしいものに、以下のような例がある。

◆《女》アイ。[と行 伴頭。袂から。毛ぬきを出して。ぬいて居る。] (『寸南破良意』6・368 地の文)

◆いふをきくに付ても清幸は気もすまず多ばことあくびをたかい違イにして居る (『穴千鳥』7・518 地の文)

これらの例は、いずれも動作が連続的に繰り返しおこなわれていることを示しているが、時間が抽象化されておらず、反復性のカテゴリーには入れられていない。この場合は、瞬間的な動作が繰り返しおこなわれたその全体を継続としてとらえているもので、アスペクト的には、動作の継続となる。

⑥単なる状態

◆御門番のせうふ草にお菓をかつてちいさくなつて御門を出遣入ウするちんころウ見るやうな野郎たア違てゐるハイ (『南客先生文集』9・428 会話)

◆もしもしなぜだまつて居なんす。(『芳深交話』9・276 会話)

◆《息》ほんのかかさうそのかさんとつて二人もつていなさるか (『山下珍作』11・163 会話)

「違う」などは動詞自体が動作過程を持たず、アスペクト的ではないのだが、「もつ」などは明らかに動作性を含む。いずれにせよこれらの用例も、テイル形において動作の過程は問題とされず、状態をあらわしている。

3. 《まとめ》

以上、洒落本資料中におけるタ形、テイル形のアスペクト的意味を用法ごとに見てきたが、工藤 1992 の表にならってまとめたものが次の表である (表2)。

現代日本語における表のテイル形と比較すると、パーフェクト性をあらわす用例がないことがわかる。但しこの現象が純粋にテイル形動詞の発達過程をあらわすものであるとはすぐに結論付けることはできない。洒落本という内容上、用いられる描写や構文が似通ってくるであろうし、また会話体洒落本の文体的特長と

して論理的文章があまりなく、構文も単純であるという理由もあるかもしれない。

(表 2)

形式\意味	基本的意味	(時間限定的)←派生的意味→(時間非限定的)		
タ	〈完成性〉	〈パーフェクト性〉	反復	単なる状態
テイル	〈継続性〉		反復	単なる状態

しかしあえて、洒落本資料中のテイル形がパーフェクト性という意味を持たなかったと仮定すると、他にどのような形式がパーフェクトの表現を担っていたのか、という点が問題になるのだが、テイル形の③で触れたとおり、現在パーフェクトに限っては、タ形がその役割を持っていたと考えられる⁸。

また、数はわずかではあるが、タ形においても状態をあらわす用例が見られることは、タリ・リ形からタ形へと変化を遂げたアスペクト体系において、古典語的な性質が部分的にわずかながら残存しているということがいえるだろう。

なお同じ動詞がある用例では状態をあらわし、ある用例では継続をあらわすという場合が見られた。動詞のなかでも極端にある「ある」「いる」のような状態をあらわすものはアスペクト的対立を持たないが、そのほかの動詞のなかでも、動作性が強いものから状態性を強くあらわすものまで幅がある。たとえば「落ちる」という変化動詞は瞬間的な動作をあらわし、動詞自体が持っている時間的概念は非常に短い。一方、「塗る」という動作動詞はその動作が瞬間的に完成するわけではなく、動詞自体がある程度の時間を含み持っていることになる。また「待つ」という動詞はそれ自体、「その場にとどまってじっとしている」という意味を含み、さらに長い時間的概念を含み持っていると考えられる。このように、それぞれの動詞が内在している時間の概念は動詞によってことなり、それがタ形やテイル形をとったときのアスペクトの意味に影響しているのではないだろうか。動詞の持つ状態性の度合いと、タ形、テイル形における「状態」の用法との関連性についても今後さらに調査していきたい。

(うえのさえ 文学研究科日本文学専攻修士課程修了)

【参考文献】

奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐる一金田一的段階」『国語国文』8 宮城

⁸ 依然としてタリ形での用例も見受けられるが、タリ・リ形は全体でも 47 例しか出現がなく、そのうち 38 例までが地の文での用例である。

教育大学

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (『日本語動詞のアスペクト』所収)
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1-2 明治書院
- 工藤真由美(1986)「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学解釈と鑑賞』51-1 至文堂
- 工藤真由美(1987)「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91
- 工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことばの科学・3』むぎ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1965)「現代日本語の動詞のテンス—言いきりの述語につかわれた場合—」『ことばの研究 2』秀英出版
- 高橋太郎(1985)「現代日本語動詞のアスペクトとテンス」国立国語研究所報告 82 秀英出版
- 高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房
- 福嶋健伸(2002)「中世末期日本語の～タについて—終止法で状態をあらわしている場合を中心に—」『國語國文』71-8 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 野村剛史(2003)「存在の様態—シテイルについて—」『國語國文』72-8 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 野村剛史(2004)「近世スタンダードの動詞アスペクト」『月刊言語』2004年4月号 大修館書店
- 湯澤幸吉郎(1954)『増訂江戸言葉の研究』明治書院
- 吉川武時(1976)『現代日本語動詞のアスペクトの研究』麦書房

【使用した資料】(いずれも『洒落本大成』中央公論社 による)

- 郭中奇譚(明和6) 遊子方言(明和7) 辰巳之園(明和7) 南江駅話(明和7) 俠者方言(明和8) 南閨雑話(安永2) 婦美車紫鹿子(安永3) 古今馬鹿集(安永3) 甲駅新話(安永4) 寸南破良意(安永4) 青楼楽美種(安永4) 当世左様候(安永5) 穴千鳥(安永6) 広街一寸間遊(安永6) 売花新駅(安永6) 妓者呼子鳥(安永6) 世説新語茶(安永6) 郭中掃除雑編(安永6) 大通秘密論(安永7) 胡蝶夢(安永7) 傾城買指南所(安永7) 契情買虎之巻(安永7) 深淵情(安永7) 一事千金(安永7) 南客先生文集(安永8) 深川新話(安永8) 駅舎三友(安永8) 粹町甲蘭(安永8) 伊賀越増補合羽之竜(安永8) 喜夜来大根(安永9) 娼註銚子戯語(安永9) 真似山気登里(安永9) 多佳余字辞(安永9) 風俗砂弘伝(安永9) 芳深交話(安永9) 遊婦里会談(安永9) 通仁枕言葉(安永10) にやんの事だ(天明1) 山下珍作(天明2) 大劇場世界の幕なし(天明2)